団長報告

マレーシアでの学びが「Build Your Dreams」

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会　事務局長
弓場　秋信

出発の朝，第30回目の事業が実施できることに深い感慨を覚えると共に過去の事業が走馬灯のように頭をよぎった。毎回変わるホームステイ先，可能な限り団員一人でのホームステイ，看護師やマスコミの同行，事前研修の充実など。これらへの拘りが，本事業の継続へと繋がり30回目を迎えている。

先進国の仲間入りを目指し経済発展が続く首都クアラルンプールから北へバスで約３時間，自然豊かなホームステイ先ペラ州レンゴン地区の集会所に到着。ホームステイ受け入れ家族や地区の関係者の歓迎を受け入村式に臨んだ。団員は，早速マレー語の洗礼を受けるも，優しそうな家族の眼差しに安堵し夫々のホームステイ先へと向かった。私は入村式で家族に果物の王様ドリアンが大好きだ，と話したせいか食事の前に完熟ドリアンが３個もテーブルに置かれた。同行者の怪訝な顔をしり目に天にも上る気持ちで早速頬張ると，その美味しさにマレーシアを実感した。

今年の２月，小学校の先生を退職した鹿児島市在住の田ノ畑さん66歳が，パスポートを初めて取得して，協力隊員としてペラ州に赴任した。任地出発前に協力隊志望動機を伺い，その意識の高さに感激し今年の派遣先をマレーシアとした。ホームステイ先から約２時間バスで移動，田ノ畑さんが活動中の小学校に到着すると，校長先生・地区教育委員会・児童の大歓迎を受け団員に笑顔がこぼれた。現地小学生の民族舞踊の披露，鹿児島側のマレー語の歌を含む日本の歌紹介そして田ノ畑さんの活動報告を続いた。学校側の心温まる対応に田ノ畑さんの人柄と活動内容への評価が見て取れた。

翌日，青少年活動で派遣されている谷口隊員の活動現場を訪問した。同隊員の活動報告の中に，今まで知る機会の少なかったマレーシアの社会的弱者の現状が紹介された。経済的発展を続ける中で取り残された人々，価値観の変化に戸惑う若者。これらの課題に真摯に向き合っている隊員の姿は，眩しく頼もしく感じた。

協力隊員の活動現場訪問の他にレンゴン地区中学校を訪問した。事前の情報では私達の訪問が放課後になる為，ひとクラスのみとの交流と聞いていたが，校長先生を始め殆どの生徒が残り大歓迎を受けた。指差しマレー語会話帳を片手に英語を交えての文化紹介と同世代同士の語らいは，予定時間を忘れての交流となった。

ホームステイ１日目の夜，全てのホームステイ受け入れ家庭を訪問し謝意を伝えると共に不都合がないか団員と家族に尋ねた。そして３日目の夜，再度訪問し村の現況を見聞した。人口約3000人のマレー系住民が殆どのレンゴン地区は，経済環境の変化に対応すべく米作からゴム農園と果樹栽培に転作が進んだとの事。また退職後に故郷に戻り第２の人生を楽しむ人も少なからずいる自然豊かなロングステイしたくなる村であった。

団員15名は，７泊８日の中で，将来の進路，生き方，言語，宗教，価値観，民族等について考えさせられた。この事業での学びが，団員の夢の実現（Build Your Dreams）に活かされることを願っています。

食後のデザートにドリアン

ホームステイ最終日のお別れ会（本人左から２番目）

同行者が感じたこと

マレーシアでのホームステイ

（公財）鹿児島県国際交流協会　総務企画課長
藤井　一彦

私がホームステイでお世話になった所はマレー人が多く暮らしている村で，午前５時頃には，大音響で流れるコーランの章句で目が覚める。子供たちも早起きで，起床後は，「mandi」（日本的には水風呂）で身体の汗を流し清め，朝食後まだ薄暗い中，親が運転する車やバイクで通学する。中には，バイクの後部座席に子供２人，ハンドルの前に子供１人乗せて運転している母親もいた。しかもノーヘルで。日本では見かけない光景ではあるが，この村ではこれが当たり前のようだ。子供も年齢に関係なくバイクの運転ができれば，親からバイクを買い与えられる。私のホスト宅にはバイクが４台置いてあった。

昼間の日差しが強いのは当たり前であるが，朝夕は意外と涼むことができた。村人は午後８時を過ぎる頃になると，車やバイクで近くのドライブインに出かけ，軽食やジュース，シュガーたっぷりのコーヒーを飲みながら，家族や友人と楽しいひとときを過ごす。たまには午前様になることもあるらしいが，イスラム文化圏の村では二日酔いになることはない。

私がお世話になったホスト夫婦は，履歴書によると，ファザー（私より年下ではあるが）：46歳，マザー：45歳と若く，子供が５人もいるのだが，職業欄にはファザー：「退職」，マザー：「主婦」となっている。どうやって生計を立てているのか気になる。

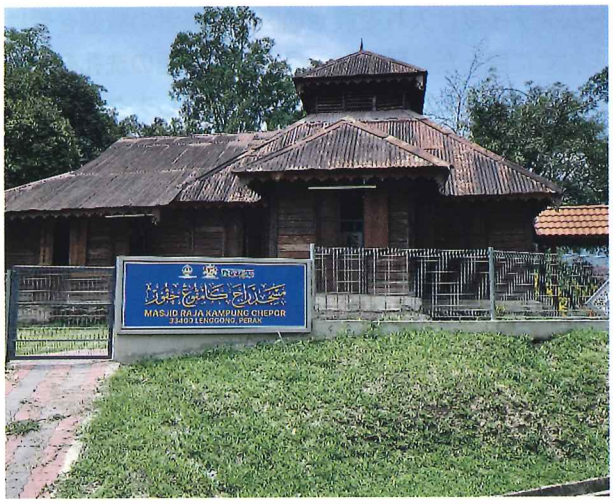
ファザーは19歳で陸軍に入隊し，軍の規則により23年間従軍，３年前に除隊したそうだ。2013年にサバ州北部の村をフィリピンのイスラム武装勢力が不法占拠したことで紛争が勃発し，マレーシア軍の勝利となったものの，彼の部隊の殆どの兵士が亡くなるという銃撃戦を経験したそうだ。「兵役中は，家には帰れず，妻や子供たちに心配や苦労をかけた。子供たちが成長するまでは一緒にいたい。」とその時思ったそうである。時折見せる厳しい顔とは裏腹に，子煩悩な父親である。彼の今後の人生設計をじっくり聞きたかったが，なかなかその機会もないまま村を離れる日を迎えた。

時間が惜しかった。朝５時，早めに朝食を済ませ，ホームステイと毎日の送迎の御礼を言った。そして，子供たちに接して感じていたこと，「子供たちはあなたの背中を見て立派に成長していると思う。とても素晴らしい家族だ。」ということを伝えた。

ファザーは「グッド！」と親指を立て，「また，マレーシアに来ることがあったら，ぜひ寄ってくれ。今度は嫁さんも一緒に。そして，皆で”Drink”しよう。」とニコッと笑った。何故か目頭が熱くなるのを感じた。

４日間の短いホームステイではあったが，ホストファミリーには本当にお世話になった。おかげでイスラム文化圏の村の生活を経験することができ，心から感謝したい。

最後に，今回のマレーシアでの貴重な体験は，必ず団員の一生の財産になると思う。これを糧として，将来の鹿児島，日本を担う人材に成長して欲しいと思う。緊張とストレスの毎日ではあったが，素敵な８日間に同行させていただき本当にありがとうございました。



約 100 年前に建てられたモスク

ホストファミリーと Drink（郊外のレストランで）

同行者が感じたこと

JUMPALAGI
～またいつかどこかで～

青年海外協力隊 OV
北田　尚子

31年前の夏，私がマレーシアで青年海外協力隊員として活動していた時に，この事業で鹿児島県から中高生がやってきた。私の活動視察はかなわなかったが，私は団員が泊まるホテルで合流し，行動を共にした。今年は，近年コロナ禍で行けていなかったこの事業が30回目の節目を迎えるにあたり，初回で訪れていたマレーシアに派遣したいとのことでお手伝いすることになった。受け入れた側が今度は受け入れてもらう側へ，なんとありがたいご縁だろう。

第一回目研修はあっという間に終わり，第二回目研修も天候不良のため，宿泊なしで時間を大幅に短縮しての実施となり心配したが，それでも私は団員を信じていた。必ず笑顔があふれる時間になると思っていた。

いよいよホームステイ先へ。多くの団員がホームステイがとても楽しみという一方で，同時に不安に感じているのも伝わっていた。予定より少し遅れての到着となってしまったが，大歓迎ムードでほっとする。ホストファミリーと団員を引き合わせる時に，背が高い，低いというだけで笑いが起きていたのはマレーシア側もテンションマックスになっていたのだと思う。良かった，どの家族も優しそうな人たちばかりだ。少しほっとした。家や家の設備については多少の当たり外れがあっても仕方ないけれど，家族についてはみんなが当たりであって欲しかった。

その夜は同行者６名で団員15人全員の家を回った。不安そうな団員，まあまあ元気そうな団員，それぞれだったけれど，私は大丈夫と感じていた。３日目の夜は私たちの見回りを希望する団員はいなかった。たった３日なのに，もうたくましい。

色々な手違いがあって，自由行動の日やお別れ会の夜，ホストファミリーと離れてしまった数名の団員がホストファミリーと電話で連絡を取りたいと言ってきた。皆自分で話をすると言う。私は本当に嬉しかった。私はマレー語が話せるけれど，私の出番など少ない方がいい。困った場面ではちゃんと頼ってくれ，自分でやれる時はやってみる。私はそういう団員たちを本当に頼もしく誇らしく思った。迎えに来たホストファミリーを見てほっとした表情になった団員たち，ホストファミリーと楽しそうに笑う団員たちを忘れない。

君たちは大丈夫。これからいろんなことがあるけれど，だいじょうぶ。恐れることなく世界に飛び出してほしい。信じている。

今回の派遣は個人的にも嬉しいことがたくさんあった。田ノ畑隊員の視察で子どもたちが歌ってくれた『幸せなら手をたたこう』のマレー語バージョンは私が隊員だった頃，他の福祉隊員と講習会を開き，広めていったものだ。谷口隊員の活動場所の責任者は，私の少し後の今でも連絡を取り合う隊員から学び，現在まで変わらず障がい者に関わっている。他にもあちらこちらでつながりが分かり，とても感慨深い日々だった。JICA の活動は根付いている。

今回このような機会をいただき心から感謝している。本当にありがとうございました。

また会いましょう。

（本人あり：真ん中）ホストファミリーと

「幸せなら手をたたこう」を歌う団員

同行者が感じたこと

マレーシアを通して感じたこと

青年海外協力隊 OV
五反田　えりな

マレーシアに降り立った時の第一印象は，都会！

首都クアラルンプールは高層ビルが建ち並び，多くの屋台や店で電子マネー使用が可能，他インフラ整備が成されていた。コロナ禍で急速に IT 化が発展したというマレーシア。ホームステイ先や現地中学生との交流時で多くの人がスマートフォンを所持し，多くの家庭が WiFi の設置や冷蔵庫や洗濯機，車やオートバイを所有しており，自分の途上国への勝手な偏見に気づかされた。

現地中学生との交流や，協力隊隊員活動先，ホストファミリーと行く先々で手厚い文字通りの大歓迎を受けた。ホームステイ先の村では，家族なのかわからないくらい村人の絆が強く，村全体が一つの家族のようだった。マレーシアでは1日6食とる文化があり，村で常時満腹で過ごし，村や近隣の案内や伝統衣装を「これ着てみて！」と着せてもらい，その衣装を「あげる。日本で着てね。」と頂くなど，こうしてあげたい！というマレーシアの人々の熱いおもてなしの心と優しく温かな人柄を感じる日々だった。他にもイスラム教徒の村人たちと過ごすことで，女性でもバイクに乗り，ズボンを着用するなど私の過ごした事のあるイスラム教徒の生活様式が国や文化，歴史等で異なることを感じた。

障害児教育で活動している田ノ畑隊員の活動先では，学校内に障害児も学べる環境があると知り，現地中学生との交流などで文化や教育を見学できた。

マレーシアとはなんと素敵な国なのだろう！と感動していたが，青少年活動の谷口隊員が活動する団地住民の生活を聞き，捨てられた残飯などの上を裸足でサッカーをしていることや，過酷な生活環境に置かれている家庭もあり，衛生面や貧困，虐待，麻薬等の薬物使用など問題があることを知った。ホームステイ先では小さな子供が親を突然死や事故で亡くし叔父や叔母，祖父母に育てられているとの話も聞いた。大きく発展している印象を受けたが，生活習慣病の増加など予防医学や都市と村での医療アクセスの格差，他多くの問題がある事を知り，体験事業を通して異文化含め学び，自分にできる事とは幸せについて考えさせられた。

団員の出国前の緊張した姿が，マレー語やボディーランゲージでのコミュニケーションに奮闘しながら笑顔に変わり，ホストファミリーとの時間を大切に過ごし，別れの時にはまだここに残りたいと涙を流し，やり遂げた表情で帰国した姿を目の当たりにし，胸が熱くなった。この事業での多くの出会いと経験が未来の団員や自分自身にどう影響するかとても楽しみである。

今回コロナウイルス感染流行が沈静化し事業再開され，デング熱流行の情報もある中で出発となった。しかし同行中も日本でこの事業を支える方々や同行者のお力を感じ，体調不良に心配した団員もいた中，JICA マレーシア事務所の助けも得られ，団員それぞれに乗り越え変化していく団員の姿に私自身励まされ助けられた。そして皆が無事帰国できたことに感謝したい。今回出会えた皆さんへ感謝！テリマカシー！

村のみんなとのお別れ

（本人あり：左）
伝統衣装のバジュクルンを着せてもらう

同行者が感じたこと

ジュンパラギ，マレーシア！

南日本新聞社　報道部　記者
中野　あずさ

夜明け前，集落一帯に響き渡るアザーン。イスラム教徒（ムスリム）に礼拝を呼びかける朗唱だ。ホームステイ先がモスク（礼拝所）の近くだったこともあり，厳粛な雰囲気に包まれて朝を迎えた。

滞在中は，イスラム教が住民の生活に根付いていると感じる場面が多かった。印象的だったのは女性の服装。戒律で家族以外の男性に肌や髪を見せることが禁じられている。どんなに暑い日でも長袖で，頭は「トドゥン」というスカーフで覆っていた。

ここ数年，アフガニスタンのタリバン政権が女性の教育を制限したり，イランでスカーフの着用を抗議するデモが起きたりとイスラム教の人権を巡る報道が相次いでいる。全てのイスラム教が女性を抑圧するわけではないと理解していたが，マレーシアの現状に関心があった。

レンゴンの人たちになぜ熱心に信仰するのか問うと，30代女性は「ここのイスラム教は中東のテロリストとは全く関係ない。女性を大切にする」とし，20代男子大学生は「宗教は人生の中で一番重要」と答えた。彼らにとって教えを守ることは，正しく生きる「指標」になっていると感じた。

ふと，鹿児島県内のムスリムの暮らしが気になった。モスクやムスリム向けのハラルフードを扱う店が十分に整っているとは言えない。在留外国人が増える中，住みよい街づくりは進んでいるのか。注視し続けたい。

現地の青年海外協力隊との交流は発見の連続だった。ペラ州で障害児支援にあたる田ノ畑祥一さんは，昨年３月に鹿児島市の特別支援学校を退職後，66歳でマレーシアに渡った。東日本大震災でのボランティア活動や，アフガニスタンなどで医療活動に尽力した故・中村哲さんの言葉をきっかけに，「世界のために自分ができることは特支だ」と隊員を志したという。

若い団員の皆さんがたくましく成長し，夢に向かって道を切り開く姿をうらやましく感じていた。一方で新しい舞台で奮闘する田ノ畑さんの姿に，挑戦を“遅すぎる”と気後れすることはないと思い直した。社会人になって，何かに挑戦する機会はめっきり減った。“一歩踏み出す勇気”を持ち続けたい。

ケダ州の谷口亮さん（青少年活動），田中健志さん（障害者支援）からは，首都・クアラルンプールとの経済格差や，障害者の就労支援など山積する課題を教わった。実際に解決に取り組む隊員の言葉には重みがあり，先進国入りの難しさを痛感した。ロシアのウクライナ侵攻は日本に原油価格の高騰をもたらし，世界の問題は国境を越えることが浮き彫りになった。遠い異国の出来事と思うのではなく，自分事と受け止めたい。

村を離れる朝，ホストファミリーとの別れを惜しむ団員の姿を見て自然と涙がこぼれた。娘のようにあたたかく受け入れてくれた家族と，「二度と会えないかも」と思ったからだ。先日，パッチ（おじさん）から「いつでも帰っておいで」とメッセージが届いた。いつか必ず，会いに行きたい。ジュンパラギ（また会いましょう），マレーシア！

（本人あり：右）ホストファミリーと

（本人あり：真ん中）取材の様子

同行者が感じたこと

異文化に飛び込んだ夏の１週間

KKB 鹿児島放送 報道情報センター ニュース部　記者
田上　晶

マレーシアに出発する前，どんな国で，どんな人が住んでいて，歴史などについて，自分なりに調べて，出発の日を迎えました。現地に到着すると，「百聞は一見に如かず」という言葉を身をもって感じました。クアラルンプールの高層ビルに圧倒され，道路はきれいに舗装され，歩く人や流れる音楽は現代的，私の持っていた古典的な印象は180度変わりました。そして，事業のメインであるホームステイ。村は自然豊かで，確かに日本と環境は違えど，住居は人が住むには充分で，通信環境などは日本よりも進んでいる家庭もありました。入国してから驚きの連続でした。ただ，一番の驚きは，現代的なものなどではなく，人の温かさや優しさでした。人のために奉仕すること，行動することをいとわず，笑顔で接してくれる村の人には言葉を超えて，人間として尊敬の念を抱きました。そしてその人たちの生活にはイスラム教という宗教が密接に関係していることも生活を通して感じました。モスクでの１日５回のお祈り。実際に村の人がモスクでお祈りをしている場を見に行きましたが，普段接する時とは少し違うものを感じました。緊張感という言葉が正しいのか，厳かな場で見せる表情は，私の背中がピシッと伸びるような感覚を覚えました。村の人のイスラム教への信仰心を，私がすべて理解することは難しいですが，モスクで見た表情や感じた空気は，日本では感じることのないものでした。

最後に，団員の現地での姿についてです。

印象に残っている団員の姿はたくさんありますが，１つはホームステイの村に向かう前の表情です。緊張と不安と心配，１人では抱えきれないぐらいの思いをもって，これからのホームステイに向かっている姿が忘れられません。到着すると入村式での大歓迎，現地の人の温かさに触れたあとの団員の安心した表情。１時間前の緊張した面持ちが嘘のようでした。少しのきっかけで，みんなは大きく成長していくんだなと感じた時でした。２つ目はホストファミリーとの別れの時間です。思いが溢れて涙を流す姿を逃すまいと，必死にカメラを回していました。落ち着いて映像を見返すと，私の心にもジーンとくるものがありました。その涙は，別れるさみしさもありましたが，一番はホストファミリーへの感謝の涙だったんだろうと，感じました。色んな思いを包みこんでくれて，「第二の家族」のように接してくれたホストファミリーへ感謝を伝える団員の姿は，また一段とたくましく，そして人間としての優しさを蓄えているような印象でした。教科書では学べない生身の経験だからこそ味わえるこの瞬間を，この年齢で味わえている団員が羨ましく思いました。そんな姿をもっと上手に撮りたかったという取材者として悔しい思いもあります。私自身もこの経験をこれからの仕事に活かしていきたいと思います。こんな素晴らしい経験をさせてくれた15人の団員，そして同行者，事務局の皆さん，その他関係者の方々に心より感謝いたします。

（本人あり：右）モスクを案内してくれた人との１枚

（本人あり：真ん中）印象的だった別れのとき